

[ブーケ]

bouquet



日本めぐり

日本各地で文化や芸術を支えている方々を取材する本連載、今回は、国内唯一のシンバルメーカーを訪ねました。

第12回 大阪府大阪市

小出俊雄 株式会社小出製作所

大阪市にある小出製作所は、国内唯一のシンバルメーカーです。1947年の創業以来、金属製品の生産に尽力してきた一方、平成の半ば頃からシンバル製作にも着手し、現在に至ります。大学や研究機関とともにシンバルの音の響きに関する研究を重ね、独自の合金を使用した逸品が人気を博しています。

“オンリーワンの”シンバル目指して

― 御社におけるシンバル製作の歴史を教えてください。

小出…もともとは戦争への供出で金属製品が不足していたとき、父とその兄弟が創業して鍋や機械製品などを売り出したのが始まりです。その後1960年代にビートルズが世界進出し始めた頃、当時取引先だったサカエリズム楽器という会社がドラムセットを作っていて、たくさんシンバルが必要だけど、外国から入手していたからすごく高いわけです。1ドルが360円などの時代ですから。それで小出製作所で真鍮製のシンバルを作ることになりました。その頃は忙しくて、途中でやめてしまったのですが、その後入社した社員がドラム好きで、「本物のシンバルを作りましょう。日本にはシンバルメーカーがないからオンリーワンです！」なんて言われて、25年ぐらい前からシンバルの研究を始めました。まずはトルコ製のシンバルを解析して、たいて作っているということ、銅



小出俊雄（こいで・としお）

株式会社小出製作所2代目、代表取締役社長。約25年前より、唯一の国産シンバル製作に着手。2019年には「センシティブ・シリーズ」が中小企業庁長官賞を受賞。

と錫^{すず}の合金である、青銅を使っているということが分かりました。でも材料となる合金を作る会社がない。それがいちばん難しい課題でした。やっと見つけたところから輸入して、実際に作ったものをドラムショップで確認してもらって、2003年頃からようやく売り始めました。現在は4名で作り続けています。

― 現在もシンバルの材料は当時と同じところから仕入れているのですか？

小出…そのときのシンバルは、B8という材料を使っていて、現在も世界の各メーカーが製造しているものなのですが、銅92%、錫8%という割合の青銅で、柔らかくて割れやすいんです。だから、伝統的なシンバル材を使った本格的なシンバルも作りたいと思い、トルコのメーカーから材料を取り寄せて新たなシリーズを完成させました。その後、シンバル製造に興味をもっていた大阪合金工業所という会社が声を掛けてくれて、材料を作ってくれることになりました。他にはない材料を作ってみようということで、錫の配分を調整してシンバルとしてはいちばん硬いところから作ってみたり、あとはジルコニウムや鉄を混ぜて音の長さを調節したりもしてきました。

― 実際、シンバルはどのような手順で作られるのでしょうか？

小出…基本はたたいて形を作るといってそれだけで、製造過程として

微妙な違いにも感じるところがあるわけです。

国産の魅力の世界へ

― シンバル作りを通して、いちばんやりがいを感じるころはどこですか？

小出…今日も演奏者の人と会っていましたが、いろいろな人と話す機会があつておもしろいです。その人から、イタリアのミラノのオペラ座で小出シンバルを使っているよって聞いて、そういう話はやっぱりうれしいですね。

― 海外でも使ってもらえているということですね。海外メーカーが多い中で、国産シンバルの魅力とはなんでしょう。

小出…海外メーカーと違う材料を用いつつ、さまざまなシリーズのシンバルを作っていることです。また、ジルジャンやセイビアンなどの海外メーカーが伝統的な材料や製法に基づいてシンバルを製造しているように、大阪合金さんと協力しながらですが、一貫して自社でシンバル製作を手がけているというのはなかなか珍しいことだと思います。

― シンバルは学校現場でも使われますが、取り扱い方で気を付けるべき点がありますか？

小出…手の汗などをそのままにすることで錆びてしまつて、音に影響が出ます。だからいつまでもきれいな状態を保つためにも、使い終わったら拭いてもらえればと思います。

― 最後に、今後の展望をお聞かせください。

小出…国産シンバルをより世界に広めていきたいというのがいちばんです。去年から、アジアへの進出を目指してシンガポール、タイ、台湾、香港などに少しずつ流通させています。そういう場が増えていったらいいな。そして、いずれはヨーロッパなどでも演奏されるようになることを願っています。



種類に応じて、それぞれの厚さに調整する作業



ハンマーでたたいたあとのシンバル



ハンマーでたたく作業。機械を使って、速さと圧力を統一している



成形したあと、まだ熱いうちに素早く冷やす



熱された金属板を成形する機械



シンバルの材料となる金属板

教育百景

おしえ・をだてのりゆ

学校とは異なる環境で、教育活動を行っている先生をご紹介します本連載の第5回は、前大河原町立大河原小学校校長で、2025年度全日本吹奏楽コンクール課題曲Ⅰの作曲者である杉山義隆先生にお話を伺いました。

2025年度
全日本吹奏楽コンクール課題曲Ⅰ作曲者
宮城県大河原町部活動外部指導員（吹奏楽指導）



第5回

すぎやまよし
杉山義隆先生

『祝い唄と踊り唄による幻想曲』 作曲秘話

— この度は、第34回朝日作曲賞の受賞おめでとうございます。まずは受賞作である『祝い唄と踊り唄による幻想曲』を作曲された経緯について教えてください。

朝日作曲賞には、これまでも5年に1回ぐらいの頻度で応募していたんです。管理職になってからは忙しくてそれどころじゃなかったのですが、昨年の新年会で、古くからの友人に「退職祝いに課題曲を書いてみたら？」と勧められたのがきっかけです。最初は、宮城教育大学の大先輩である内藤淳一先生の作品のようなカッコいいマーチを書こうと思ったのですが、4小節で挫折しました。締め切りまでタイトなスケジュールでしたので、過去に音楽教育研究大会の研究演奏用に作曲した宮城県民謡『さんさ時雨^{しぐれ}』を題材にした作品と、それと対をなす踊り唄とを組み合わせ、緩急二部構成の作品をつくることにしました。

— 和を感じさせる響きが魅力的な作品ですね。

小学校の教員時代に音楽の授業を担当していたこともあり、日本の伝統音楽に親しむ機会につながるような曲が書ければと思い、作曲しました。今回は、全日本吹奏楽連盟初の小編成（木管、金管ともに2管）の公募、そして演奏時間も4分以内という制限がありましたので、オーケストレーションに苦慮した部分もあります。ほんとうはもっとアイデアを詰め込みたかったのですが、あまりおてんばすると第1次審査で落とされるかなと思い、自重しました（笑）。

— そこから各審査を通過されていったわけですね。

6月に演奏審査のリハーサルを聴くため、休暇を取って仙台から新幹線で大阪に向かっていたところ、郡山^{こおりやま}を過ぎた辺りで教頭から「明日、臨時の校長会が入りました」と電話があり、大宮で途中下車して引き返した経験があります。最終審査に残った中で、リハーサルを欠席したのは私だけだったそうです……（笑）。

— 朝日作曲賞受賞の一報を受けての感想はいかがでしたか？

とても驚きましたが、それ以上に周りの方々がびっくりしていました。実は朝日作曲賞に応募していたことを、妻と娘以外、誰にも言っていなかったんです。受賞結果が新聞に載ると知って大河原町の教育長先生にだけはお電話しましたが、教頭や同僚にはそのことを黙っていました。しかし次の日、外出している間



▲自作を解説する杉山先生

にお祝いの電話が学校宛てに複数あったと教頭から報告を受け、黙っているわけにもいなくなって周りに話したという感じです。保護者や教え子、今まで拙作を演奏していただいた全国の先生方など多方面からお祝いしていただき、メディアの影響力をあらためて感じました。

— 作品に地元の民謡を引用されたのは、どのような思いからでしょうか？

当時勤めていた大河原小学校では、毎年4年生が日本の伝統音楽の学習の一環として、『さんさ時雨』を地元の民謡協会の方に教わっていました。それが自分の中に染み付いていたというのはあると思います。民謡は口承で伝わっていくものなので、教わる人によって歌の雰囲気は全く異なります。それを西洋の楽器で表現するにあたって、誰もが演奏しやすいフレーズに書き起こしつつ、日本的な雰囲気を残した曲にできたらいいなという思いが、いちばんにありました。

— 作品の後半部分に、当社から出版されている打楽器アンサンブル作品『小竹浜獅子舞による幻想曲』が引用されていることを知り、たいへん驚きました。課題曲や合奏曲を指導する際、演奏者にはどのようなことを伝えていきますか？

YouTubeやインターネットに頼らず、まずは楽譜に書かれた情報を丁寧に読み取ってほしいということです。特に中学生の場合、学習指導要領の（共通事項）でいうところの「呼びかけとこたえ」「テクスチャ」「リズム」などともつながってくると思います。耳から入る情報よりも、作曲者が楽譜に何を書いたのかということをまず意識してほしいと思います。



▲『響応空間第1番』『小竹浜獅子舞による幻想曲』の楽譜

作品は子どもたちの成長のために

— 先生はふだん、どのような曲をつくられることが多いですか？

これまで小学校の教員を長くやってきたので、授業の中で発展的に扱うような曲をつくるのが多かったかもしれません。子どもたちが歌う曲を書いたこともあります。私は作詞ができないので、児童が書いた詩にフレーズを付けたり、教員グループが書いたオペレッタの台本に伴奏を付けたりというようなこともありました。

— 作曲するうえで大切にされていることを教えてください。

子どもたちが楽しく練習をがんばれば手の届くレベルの曲を書きたいと考えています。現状のレベルに合わせてしまうと、それ以上は表現も技術も伸びないと思うので、子どもたちが練習を通して達成感を得られるようなレベルに設定できたらいいなというのが一つ。それから、新しい曲を生み出すのはとてもエネルギーがいることですが、同時に自分の価値観が広がっていくことでもあります。ですので、子どもたちにとっても新しい、何か今までに見たことのない景色が広がるような曲が書けたらいいなと考えています。

— とても大切なことですね。

曲を書く人が目の前にいるというのは、子どもたちや周りの教員にとって新鮮なことなんです。彼らにとって作曲家とは、音楽室に貼ってある肖像画の人物ですから。ただ、しばらくすると今度は「ここはもっとこうしたほうがいい」「こういう曲を書いてほしい」という要望がくるようになるのですが、それも楽しかったです。地方の学校だと、私みたいに小学校の教員をやりながら曲を書くという人は、中学校や高校の教員に比べるとあまり多くないのかもしれませんが。そうやって、子どもたちとずっと一緒に何かしらやらせてもらっていたというのは、ほんとうに幸せだったと感じます。

教員生活とともにした音楽活動

— 先生が教員を志したきっかけを教えてください。

あまり正確には覚えていないのですが、高校2年生の頃、恩師に「教員が向いているんじゃない？」と言われ、それから意識するようになったと思います。

小学校の教員であればいろいろな教科を教えられておもしろそうだなと思い、宮城教育大学教育学部小学校教員養成課程に在籍し音楽を学びました。

—そして卒業後、教員生活がスタートしたわけですね。

最初に勤めたのは石巻市立小竹小学校という、その年に閉校することが決まっていた全校児童6人の学校でした。そこに1年間勤めたあと、隣の石巻市立万石浦小学校へ児童とともに異動となりました。当時この6人が石巻市の音楽会へ出演するために編曲した『道化師のギャロップ』が、教員になって私が最初にアレンジした作品になります。オリジナル作品でいうと、大学4年生の頃につくった『響応空間第1番』が1作目、閉校する小竹小学校にちなんで作曲した『小竹浜獅子舞による幻想曲』が2作目になります。この作品が出版されなければ、『祝い唄と踊り唄による幻想曲』は生まれなかったと思います。

—教員生活の中で印象に残っているエピソードはありますか？

原点にあるのは、小竹小学校の児童6人と音楽会で『道化師のギャロップ』を発表したことですね。異動先の万石浦小学校では、当時の校長が「クラシック音楽が演奏できるような、木管楽器も入った中学校と同じような吹奏楽部をつくりなさい」と、予算を準備してくれたことがありました。当時は小学校のクラブ活動が活発だった時代ということもありますが、ほんとうに恵まれていたと思います。ただ、楽器をそろえるのに準備していただいた予算だと全然足りなかったんですよ（笑）。しかたなく母校の角田高校^{かくだ}に行って、廃棄されることになっていたクラリネットやアルト・サクソフォーンをもらい受け、それらを修理してコンクールに出場していました。また、柴田町立槻木小学校^{つきのき}で吹奏楽を指導しながら『合唱、吹奏楽、ピアノ、語りによるカンタータ“槻木の詩”』を作曲したことや、地元の角田市立藤尾小学校に赴任した際、教科書教材だった『生命のいぶき』（作曲：杉本竜一）を選曲して、クラス合奏でコンクールに出場したことなども印象に残っています。

全ての子どもたちに歌う喜びを

—現在の立場から、学校現場における音楽活動の実情と課題について感じることはありますか？

学校行事とのバランスをとりながら、指導計画に

基づいた音楽の授業をいかに充実させるかということが大切かなと思います。どうしても音楽科は行事に左右されてしまうと思うんです。音楽科の時数がほんとうに少ない中、行事を加味した指導計画を工夫して組むことができるかが、今後重要になってくると思います。

—先生が教員時代に授業で工夫されていたことがありましたら教えてください。

例えば、自分の音が合奏の中に混じり合っているという意識を一人一人がもてるよう、演奏の苦手な児童のために楽譜を簡易なものに書き換えることなどをしていました。合唱や合奏などの集団活動において、一人一人をいかに見取るか。どうしてもついでいけない児童への配慮として、私がたまたま少し楽譜を書けたので、そういった対応をとることができました。

—音楽に苦手意識をもつ児童へのフォローが、集団活動において大切になってくるのですね。最後に、子どもたちへ向けてメッセージをお願いします。

究極の目標は、どんな場所でも人目を気にせずおきなく、楽しく歌えるようになってもらうことですかね。専門的に音楽を勉強しなくてもいいので、細く長く、生活の中で常に音楽と関わり、親しんでいってほしいと思います。



▲取材は2025年5月8日、仙台で行われた

水代につなぐ 17 の校長先生 講話



本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第17回は、子どもたちの読書活動の充実に尽力する隅田由香利先生が、全校朝会で子どもたちに向けて語った2つの講話をお届けします。AIがめざましい発展を見せる今、人としての豊かな感性を育む大切さに気付かされるお話です。

隅田由香利（すみだ・ゆかり）
志木市立柳瀬川図書館
学校図書館事業推進アドバイザー

第17回 隅田由香利 先生（元 志木市立宗岡第三小学校 校長）

～豊かな時間と想像力と～

教員時代から、子どもたちの成長に読書は欠かせないものとして、本と触れ合う時間を大切にしてきました。読書は、ページをめくる度に新しい世界が広がるわくわくや、本の世界を想像するドキドキであふれています。

「子どもたちにもっともっと本を読んでほしい!!

活字から広がる世界を想像して楽しんでほしい!」

その思いは、校長になってから、さらに強くなりました。

退職後は、現職時の思いを胸に、市立図書館と学校図書館との連携を図りながら、子どもたちの読書活動の充実に向けた取り組みを行っています。

本には、情景を想像すると同時に自分だけの音色、自分だけのメロディーが聞こえてくる魅力もあります。現在はタブレットやSNSの普及に伴い、

活字離れが進んでいますが、ときには、デジタルの世界から少しだけ距離をおいて、本をめくったり音楽を聴いたりして、想像の世界に浸る時間を楽しんでほしいと

思います。そこには、自分だけが味わえる豊かな時間があると信じています。

学校現場を離れても、子どもたち、家庭、教職員に

読書の魅力を伝えていきたいと思います。

～本との出会いですてきな時間を～

今年のゴールデンウィークは、とても良い天気が続きました。

校長先生は、連休中にキャンプに行って、テレビのない時間を過ごして、自然の中で読みたかった本をたくさん読むことができました。

そこで、1冊の本を紹介したいと思います。それは、ヨシタケシンスケさんという人が書いた『ぼくのニセモノをつくるには』という絵本です。先生はこの本を読んで、自分を知ることとは、とても大事なことだと思いました。みんなは初めて会った人に、自分のことを詳しく説明できますか？ 自分の良くないところだけでなく、良いところもたくさん言えますか？ 自分がどんな人間かなど、ふだん考えている人はあまりいないと思います。でも、自分のことをじっくり考えてみると、良いところがたくさんあるということや、自分と同じ人はいないということにも気付いて、自分に自信がもてるようになると思います。

この本は、低学年の人でも読めるけれど、大人が読んでもたくさんのことを考えさせてくれる絵本です。

図書室にはたくさんの本があります。本の数だけ、世界があります。自分を夢中にさせてくれる本や、自分の考えを変えてしまうような本に出会えるかもしれません。自分にとって宝物になるようなすてきな本にこれからたくさん出会ってほしいと思います。

(2022年5月の全校朝会より)



学校図書館での読み聞かせに参加した子どもたちへ感想を聞く隅田先生

～良いところってたくさんある～

皆さんは、梅雨の季節は好きですか？ たぶん好きじゃない、嫌いと思っている人が多いと思います。「外で遊べない」「湿度が高くてムシムシする」など、嫌だと思える理由はたくさんあると思います。

そんな梅雨ですが、良いところもあります。どんなところだと思いますか？ もし、梅雨に雨が降らなかったら、「夏に水不足になる」「作物が育たない」など、困ることが起きます。梅雨に雨が降ることは大事な役目があります。

どんなものにも、悪いところばかりでなく、良いところがあります。

事故で体がまひしてしまい、口で筆をくわえて描いた絵や詩を幾つも発表している星野富弘さんという人がいます。その星野さんの作品にこんな詩があります。

「知らなかったよ こんなにきれいだった なんて すぐそばにいて 知らなかったよ」*

これは、ドクダミの花を見て書かれた詩です。ドクダミの花は5月から6月頃に咲きます。ドクダミは学校にもたくさんありますが、葉をちぎるとあまり良い匂いとはいえないため、どちらかというときみんなからは苦手とされています。でも、その葉はお茶にして飲むと薬になります。そして白くてかわいい花をつけます。先ほどの詩はその花のかわいさに気付いてつくったそうです。

悪いところに比べて、良いところは気付きにくいですが、皆さんには友達や家族の良いところをたくさん見つけられる人になってほしいと思います。

(2023年7月の全校朝会より)

*星野富弘 著『かぎりなくやさしい花々』(偕成社)より引用



修了式で子どもたちに講話する様子

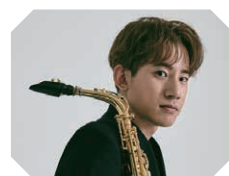
上野 耕平の crossing [クロッシング]

品川を起点に神奈川県各地を結ぶ京急電鉄。赤い電車でおなじみだ。競合するJR東海道線との関係もあり、とてもスピード感ある走行をしてくれる。近年では高架化も進み少なくなったが、まだ民家すれすれを高速で走行するスリルを楽しめる区間も健在！
今回初めて京急久里浜線の終点、三崎口駅まで行ってみた。品川から快特や特急を使い1時間ちょっと。海はもちろん、途中中山岳区間も楽しめる、1時間にしてはドラマティックな路線。
三崎口駅は終点だが、かつてここから約2km延伸する計画があった。その名残も車止めの向こうにうかがうことができる。
都営、京成などとの直通運転を含め、大都会を疾走する京急。その果てはどこか寂しい独特な表情をもった駅だった。



第21回

京急の果てまで……！



文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門第1位・特別大賞（史上最年少）。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクール第2位。17年度第28回出光音楽賞、18年第9回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×(かける)クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「妄想トレイン」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

上野耕平コンサート
情報はこちら▶▶▶

<https://uenokohei.com/concert/>
(上野耕平公式サイトより)



編集部メモ

京急電鉄は、東京都区部南部から神奈川県横浜市を経て、三浦半島の浦賀、逗子・葉山、三崎口などを結ぶ鉄道路線を運行している。
特急よりも停車駅の少ない「快特」は、品川～横浜間を最高速度120km/hで駆け抜ける。



— SDGs 特集 —

Think Globally, Act Locally

Vol. 6

出会いが生み出す
豊かなまちづくりを、ここから

小橋祐子

NPO法人わくわく理事長

“Think Globally, Act Locally”——地球規模で物事を考え、身近なところから行動を起こす——。

よりよい未来をつくっていくために、私たち一人一人にできることは何か？

この特集では、さまざまな分野の方にお話を伺いながら、そのヒントを探ります。

第6回は、障がい福祉サービスや地域のコミュニティ活動に尽力するNPO法人わくわく（福岡県北九州市）の小橋祐子さんにご登場いただきました。

今回、わくわくが地域の方々と取り組む活動の中から、

竹の廃材を利用して楽器を製作するプロジェクトをご紹介します。

竹楽器の考案者で、竹凜共振プロジェクト代表の田中昇三さんにもお話を伺いました。



Profile | 小橋祐子（こばし・ゆうこ）

北九州市生まれ。新日鐵（現日本製鐵）の関連会社を経てアメリカに短期留学し、多様性について学ぶ。その後、精神障がい者の小規模作業所で約17年間勤務し、福祉の現場を経験。2010年、有志と共にNPO法人わくわくを設立し、理事長に就任。障がい福祉や地域コミュニティ事業を展開し、SDGs達成に向けた実践を行う。精神保健福祉士・社会福祉士の資格を持つ。

たのしい輪☆ぶろじえくと
～ Bamboo boon ～



<https://bambooboon.my.canva.site/>

身近な資源の活用

— こちらでは、竹林の環境課題啓発を目的とした取り組みが行われているそうですね。どのようなきっかけでプロジェクトを始められたのですか？

小橋：竹楽器を製作している竹凜共振プロジェクトの田中さんとのつながりがきっかけです。私たちが運営する施設の一角を楽器の製作所としてお貸ししていたご縁で、作業の一端を障がい福祉サービス事業所の利用者さんが手伝っていたんです。そのうち、手際のよさを

認められて楽器作りを伝授いただき、技術者として認定を受けて、障がいをもつ方々の中で第1号のインストラクターがこの施設から誕生しました。技術者になる利点は収入面にあります。事業所の仕事には雇用関係がないので、多くの収入は見込めません。しかし技術者として楽器を製作すると、それが本人の収入になるので、仕事としてもとても意味のある活動なのです。また、この取り組みの本来の目的は、土砂災害や生態系の破壊を引き起こす放置竹林の環境問題や課題を伝えることなので、楽器製作や演奏を通じて楽しく広められる活動をやっていいこととなりました。

わくわーくで作られた竹チェロとチェロオリン



— 作った楽器はどのように活用されていますか？

小橋：多世代交流スペースで展示・販売したり、月2回ほどの竹チェロ教室や製作ワークショップ、コンサートなどを開いたりしています。また、地域のイベントにも出展して、楽器に触ってもらいつつ竹林の問題に関するレクチャーを行うなど、

出張での活動も増えてきました。子どもからお年寄りまで、どんな方でも楽しく参加できる企画を立てながら事業を展開しています。その思いを込めて「たのしい輪☆ぶろじゅくと Bamboo boon」と名付けました。「boon」には、恩恵や恵みという意味があり、また「ブーン」と電動工具で竹を切る音ともかけています（笑）。

— 地域的に竹への関心は高いのでしょうか？

小橋：北九州市では竹林の問題にかなり力を入れていて、市民ボランティアが始めた「小倉城 竹あかり」という大きな啓発イベントがあります。放置竹林に対して課題意識をもって活動している団体や学校もたくさんあり、動きはとても活発です。田中さんも竹楽器製作のインストラクターをどんどん増やしているので、楽器を作りながら啓発をし、徐々にコミュニティを広げていますね。

— 竹凛共振プロジェクトが行っている取り組みについて教えてください。

田中：北九州市では、「合馬^{おうま}」というブランドのたけのこを生産していますが、竹林整備のために伐採された竹の廃材を活用する目的からプロジェクトが始まったんです。資源の有効活用や竹害という社会課題に取り組むことにも大きな意味があるし、それをより多くの人に知ってもらうための活動を続けてきました。環境整備の他、製作やレッスン、国際会議などのレセプションでプロ奏者による演奏活動も行っています。福岡大学が運営する「竹イノベーション研究会」という、全国の専門家や企業が集まり、竹に関する環境問題や課題などを学術的に議論する学会にも当初から会員として参加したり、西日本工業大学でも大学COC事業の一環で、講義として取り上げてもらったりしています。また、産学官連携した取り組みの中で、小橋さんにも協力いただき竹楽器インストラクターをたくさん育成して、全国的な活動へと展開しています。

— 竹楽器にチェロなどの弦楽器を選ばれたのは、どうしてですか？

田中：弦楽器、とりわけチェロは、音楽になじみがないと演奏の難しい楽器と思われがちですが、誰でも弾けるようになることを目指してあえて竹チェロを打ち出しました。竹は市販の電動工具で十分加工が可能であり、DIY感覚で作れることも開発の目的だったん

です。ピッチを安定させるには少し技術が要りますが、1か月もすれば簡単な曲が演奏できるようになるし、プロが演奏すればオーケストラに加わっても遜色なく、けっこう聴かせる音が出るんですよ。

小橋：すごく身近に感じられますよね。今、竹チェロをそのままの形で縮小したものに、ヴァイオリンの弦を張った「チェロオリン」という創作楽器も作っていて、子どもでも演奏しやすい楽器を開発しています。楽器を通して竹に親しみをもってもらい、まちの資源のことを考えるきっかけもつくる、そういう発信をここからできればと思っています。

つながりが生むプロジェクトの輪

— 竹林啓発のプロジェクトの他にも多数のプロジェクトを展開されていますよね。どのように企画されているのですか？

小橋：私たちは、この場所で、障がいをもつ方の就労や生活を支援する障がい福祉サービス事業所と、子どもからお年寄りまで誰でも気軽に使える地域コミュニティの場として、多世代交流スペースを運営しています。プロジェクトでは、活動を通して障がいをもつ方の役割や仕事が増え、やりがいや生きがいを見つけられるようになるとともに、地域の多様な方々が協働して豊かな生活を創り上げることを目指しています。これまでの取り組みの多くは、地域コミュニティの場で出会い、つながった方々との対話の中から自然に始まったものがほとんどです。

— 企画を立てて進行するというよりも、つながりの中で新しい活動が生まれているのですね。

小橋：そうなんです。例えば、地域で出る古紙をアップサイクルして地域に還元する「KAMIKURUプロジェクト」は、世間話から始まった取り組みの一つです。



竹チェロを演奏する竹凛共振プロジェクトの田中昇三さん。竹は肉厚で通常のチェロよりも共鳴しづらいものの、音の伝導率が高く、「竹の音色」をストレートに感じられるという

竹で製作されたさまざまな弦楽器。独自の特許製法で作られている



施設にプリンターを導入しようとしていたときに、たまたまエプソンの方から環境に配慮した再生紙を作る機械があるのに、作業する人がいないという話をお聞きし、それなら障がいをもつ方にもできるということで、ここの利用者さんの仕事になったんです。そのうち、別のプロジェクトで関わっていた方々とも協働して、今では地域企業や学校、行政などを巻き込んだ大きなプロジェクトに成長しています。だから最初から企画があるわけではなく、コミュニティのつながりからいろいろなことがどんどん生まれている感覚ですね。

— 地域の子どもたちとの交流はありますか？

小橋：わくわーくの取り組みに賛同してくださる団体と協力して、子どもたちの学習支援を行ったり、子ども食堂を開いたりしています。あとは、こちらが学校に伺ってNPOとしての取り組みや寄付の文化、地域の身近な活動としてアップサイクルの事例などをお伝えしたり、福岡県立中間高等学校では、SDGs委員会の生徒たちが集めた古紙から作った再生紙で、卒業証書を制作したりしています。

— 教育現場とも協働してプロジェクトに取り組んでいるのですね。

小橋：そうですね。また、「KAMIKURUプロジェクト」の見学で中間高校の生徒が来てくれたときに、たまたま引率の先生が吹奏楽部の顧問で、竹楽器に興味をもってくださり、せっかく学校でSDGsに取り組んでいるのだから活用したいということで、竹チェロ6挺と竹ヴァイオリン2挺をご依頼いただきました。その年はちょうど学校の創立40周年記念だったので、周年行事の際に吹奏楽部の子が竹楽器を演奏したり、音楽の授業に

取り入れてくれたりしました。こんなふうに、別のプロジェクトでつながったコミュニティとも相互に絡み合いながら動いています。

互いを認め合い、誰もが安心して暮らせる社会を目指して

— 新しいプロジェクトを進める中で、大切にされていることはありますか？

小橋：ここに集うみんながプロジェクトのどこかに関わることで、活躍したり楽しんだりできるような交流の場を大事にしています。長年、この事業所に通うさまざまな特性をもった方々と接してきましたが、本人だけを支援しても、やはり周りの人がきちんと理解していないとうまくいかないという経験をたくさんしました。正しく伝え、知ってもらい、みんなでつながる場所をつくりたい。それがわくわーくを立ち上げた当初からの思いであり、活動のベースになっています。

— どのようなところにやりがいを感じますか？

小橋：いろいろな方とつながるおもしろさを感じるところですね。多世代交流スペースには、毎日さまざまな方がいらっしゃいます。最近では、行政書士さんや保健師さんが定期的に訪れて、無料相談をしてくれます。みんなボランティア精神をもっていて、どうすればこの場所を利用する方がもっと喜ぶかを考えて、新しいアイデアを持ち寄ってくださるので、それがすごくうれしいですね。

— 多世代交流スペースでの出会いが、さらなるプロジェクトの発展を生み出しているのですね。

小橋：わくわーくでは、「互いを認め合い、こころ穏やかに安心して暮らせる社会」をあるべき姿と掲げています。ここに来てくださるボランティアの方や学生さん、そして事業所の利用者さんたちとのつながりの輪を広げていながら、このまちの方々の役に立つ活動をこれからも続けていきたいですね。



わくわーくの活動拠点。施設内には障がい福祉サービス事業所と多世代交流スペースが設けられている

SDGs とは？

Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標)

の頭文字を取ったもの。2030年までに貧困や飢餓、福祉、教育、エネルギー、気候変動、平和的社会等の課題に対して解決策を見だし、持続可能でよりよい世界を目指すための国際目標です。国連サミットで決められた17のゴール・169のターゲットで構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。



Contents

- 04 [連載] 日本めぐり 第12回 小出俊雄(株式会社小出製作所)
- 06 [連載] 教育百景 おしえ・そだてる日々 第5回 杉山義隆
- 09 [連載] 次代につなぐ 校長先生の講話 第17回 隅田由香利
- 12 [連載] crossing 第21回 上野耕平
- 13 [連載] SDGs 特集 Think Globally, Act Locally Vol.6 小橋祐子(NPO法人わくわーく)

編集後記

『bouquet[ブーケ]』No.23をご清覧いただき、ありがとうございます。
今号の連載「日本めぐり」では、
国内唯一の国産シンバル“小出シンバル”の
製作を手がける小出俊雄さんにお話を伺いました。
独自の研究を重ねて開発された小出シンバルは、学校現場や
国内の音楽団体のみならず、海外でも徐々に活躍の場を広げているといいます。
連載「教育百景」の杉山義隆先生は、
新しい曲を生み出すのはとてもエネルギーがいることだが、
同時に自分の価値観が広がっていくことでもある——とお話しされました。
さまざまな思いを胸に編み出された楽器や作品の数々が、
世代や国境を超えて広く親しまれていくことを願っています。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

Staff

Art Direction & Design(表紙・本文):中澤美羽

DTP:浅野真理子(マール)

印刷:新日本印刷

製本:ヤマナカ製本

